

# TMU FDセミナーを実施して ー雑感ー

健康福祉学部・教授  
福士 政広

第3回の首都大学東京FD委員会主催FDセミナーが、平成18年10月5日（木）13:00より南大沢キャンパス6号館101教室において開催された。最初に、本学基礎教養育センター長・FD委員会委員長の上野淳教授よりセミナー主催者としてのご挨拶があった。引き続き、田中毎実先生（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）より、「授業能力の向上のために」と題して1時間ほどの講演をいただいた。その後、休憩ははさみ、2006年度前期授業報告（SE,TE）の概要報告を以下の順で行った。

「全学共通アンケート」 舩本直文 基礎教育センター  
「都市教養プログラム」 金子善彦 都市教養学部人文社会学系  
「実践英語」 加藤光也 基礎教育センター  
「基礎ゼミナール」 青塚正志 都市教養学部理工学系  
「情報リテラシー」 永井正洋 基礎教育センター

以上5分野についての報告があり、質疑応答を含め16:00には終了した。参加者は本学教員と本学事務職員が多かったのは否めませんが、学生の参加者も見受けられた。

さて、この度のFDセミナーのメインは、京都大学高等教育研究開発推進センター教授の田中毎実先生のご講演であった。田中毎実先生は大学教育学および臨床的人間形成論の構築、大学教育研究では、公開実験授業などで生態学的・現象学的フィールドワークを試み、研究成果のボトムアップによる一般理論などを手がけている国内外における高等教育研究の第一人者である。

講演の題名は「授業能力の向上のために」であった。田中先生はご自分でも講演は上手ではないと申しましたが正直なかなか早口で配布資料の順番とは異なり記録係としては苦労しました。

さて、講演での主なテーマは1. 普通の人の普通の授業、2. ローカリティ、3. 相互研修の3つであった。

1の「普通の人の普通の授業」に関して田中先生はご自分の経験を基に次のようなお話をされた。3年間一人で公開授業を行ったこと。その後の検討会ではさんざん早口で語尾が聞き取れないと云われた。授業では教壇を動き回っている。さらに授業がのっているときはゴリラのように腕をぶらぶらしている。一人では大変なので公開授業をリレー方式にした。しかし、授業が上手な助教授の先生がいて学生に助教授の先生の授業と比較して下手とはっきりいわれた。などの逸話を交えた経験談をお話いただいた。

そこで、田中先生いわく公開授業をその助教授の先生が行ったら失敗しただろうと思う。何故なら、飛び抜けて上手な人の授業はハッキリ言って参考にならない。普通の人の普通の授業を公開するからこそ問題点が浮かび上がってくる。また、実際に普通の人の普通の授業が大多数を占めるからで、それを向上させてこそ意義があるFDであると主張された。

また、京都大学での授業アンケートで最も良かった授業を数個選んで研修で利用した。その評判の良かった授業の共通項は体験型の授業で、これでは実際何の役にも立たないと主張された。その理由は、体験型の授業は一般的でなく、大多数の授業は講義型であり、全部体験型授業にすることは不可能な話である。特殊な授業をモデルにしても意味がなく普通の人が普通にやれることが重要であると話された。この主張には同感するものである。

2の「ローカリティ」に関して田中先生は四国の国立大学での経験、京都大学での経験の話をされた。例として、対人関係障害の先生とフィールズ賞受賞の先生の話をして、授業形態はほとんど同じなのだが学生の評価が全く逆の評価であった。これは、教師と学生の間に暗黙の了解があるか無いかで授業評価の善し悪しが大きく違ってくること。

四国での経験とは違い、京都大学では難解な問題に対して学生が興味をしめし、教科書的な問題に対しては興味をあまり示さなかった。そこで、「学生がわかる授業」は大学により異なり、その地域、教員と学生、集団を形成するコミュニティの違いなどローカリティの違いが大きく関わってくる。そのため、普遍的な授業は存在しないと主張された。

工業製品と同様に授業においても高品質で高性能でかつ均一なものを求めがちな現代社会の問題点を言い得ているものと思われた。

3の「相互研修」では、まず大学院教育で平成19年4月1日よりFDが義務化されたこと。これは早晩、学部へ下りてくるのは明白である。授業評価に関して国立は100%実施している。また、大学の自己評価ではFDをどれくらいやっているかが評価される。

また、これからのFDの動向では現在のFDの形態として、啓蒙型FDと相互研修型FDがあり、さらにI型 伝達講習・制度化型、II型 伝達講習・自己組織化型、

Ⅲ型 相互研修・自己組織化型、Ⅳ型 相互研修・制度化型である。

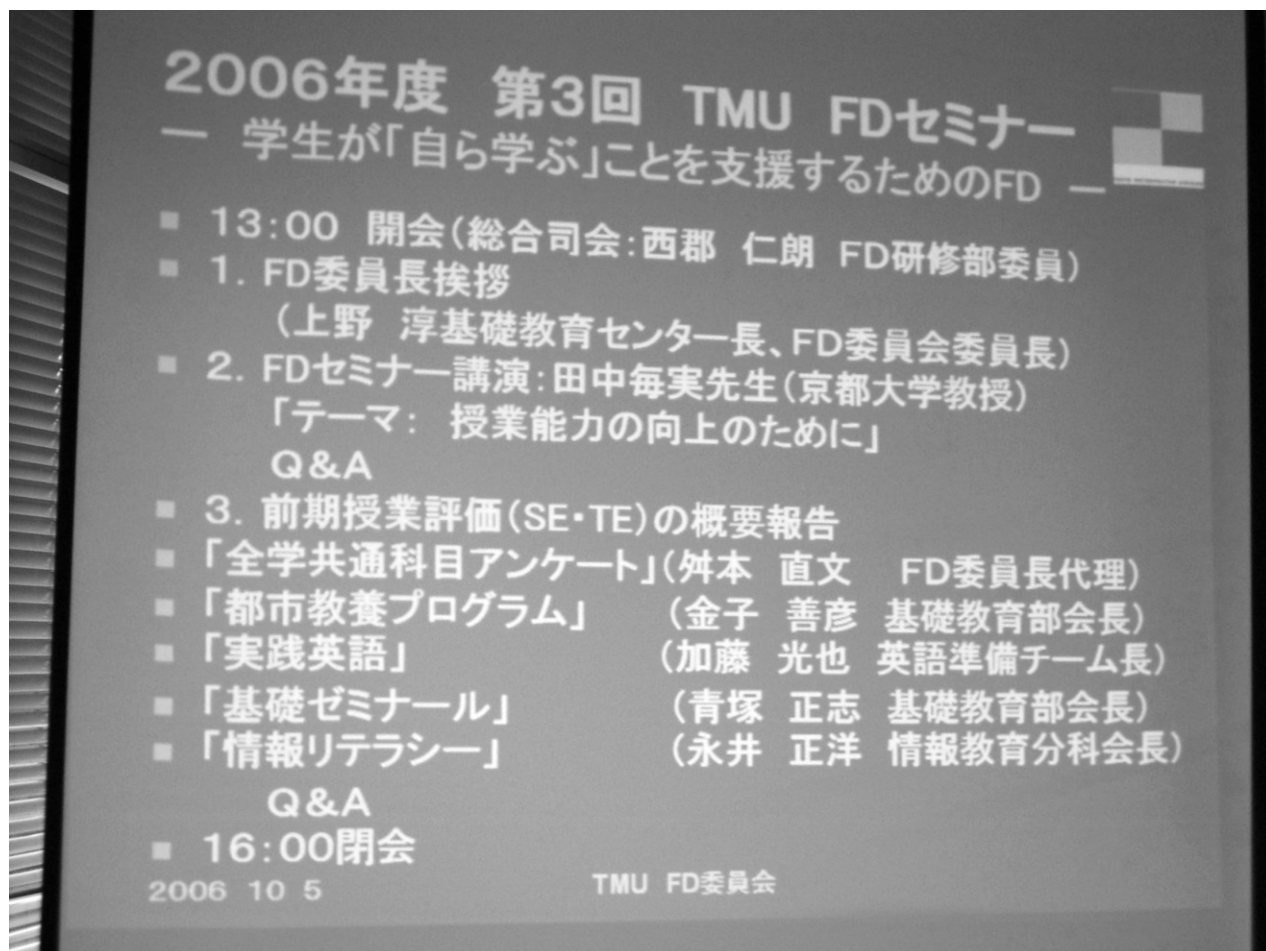
本日の講習はⅠ型であり、Ⅰ型はだんだん減っているのが現状である。最近の私の講演は、アンケート集計結果の報告後にコメントを求められることが多くなっている。そして、現在はⅢ型の相互研修・自己組織化型へ移りつつある。しかし、これも大学により大きな差があり、Ⅰ型すらないところもある。

Ⅰ型の伝達講習・制度化型のトップダウン型はもはや意味が無く、相互研修を主体とすることが重要である。大学のアメリカ化（経営と教育・研究の分離）そして第二のアメリカ化（教育と研究の分離）が進み、分業化（スペシャリスト化）され、相互研究が無くなってしまいそうである。このことは、官僚化が進み、無意味な書類が多くなり、今後の大学教育のあり方を大いに心配している。地についたローカリティを持ち、普通の人の普通の授業、そして相互研修の重要性を持ち続けることの大切さを主張された。

その後、質疑応答では上野先生と舛本先生から部局によりFDへの取り組み具合とその進捗状況について、学生参加型FDについての質問があり、特に学生参加型については日本のような伝統的學生（高卒で大学に入学し、4年間で卒業する學生）、いわゆる通過型の學生主体では難しく、創意工夫が必要であると述べられた。學生の能動的な参加を促すことの難しさを実感するものであった。

なお、2006年度前期授業報告（SE, TE）の概要報告については各アンケートの概要報告に委ねます。ただし、質疑応答において教員評価と學生評価の乖離について、教員側は概ね、よい評価をするものであり、學生と乖離するのは当然であるとのこと指摘があった。

この度の通算第3回FDセミナーへの参加者は本學教員42名、本學職員17名、本學學生10名およびその他7名の計76名であり、本學FDへの関心の高まりが少なからず伺えたFDセミナーであった。



(第3回FDセミナー風景)